
ヒナギク・雪路の過去

arutema

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒナギク・雪路の過去

【Nコード】

N4591H

【作者名】

arutema

【あらすじ】

桂ヒナギクと桂雪路。二人の過去をオリジナルで制作した物語。最初と最後の回想以外の部分は、ヒナギクがナレーターをしていると解釈してください。

（前書き）

なんか無性に書きたくなりました。

二度と経験したくないことがある。それは、私達にとっては信じられないことだった…。

某月某日。分かるのはその日、ヒナギクは5歳で、雪路は18歳だったこと。その運命の日の朝。

「ねえ、お父さん、お母さん？どうして話さないの？」

この日と前日の親は不自然だった。何か細かいことですぐに喧嘩になったり、会話なんか以ての外だった。

「そうよ。お父さんとお母さんがそんなのじゃあ、こっちの調子も狂っちゃうわよ！」

ヒナギクに次いで雪路が続く。

「…ごめんね…」

なぜか両親は泣き出す。

「ちよっ…母さん？なんでこんなことで泣くのよ！」

父親も辛そうな表情だ。今考えると、それはある意味での愛情だったのかもしれない。

「…うん…なんでもない…。あ、もうこんな時間よ…！学校行きなさい！」

「あ、うん」

雪路もヒナギクもこの日、何かが起きるとは容易に想像できた。しかし、それが何かはもちろん想像できないことだった…。

ヒナギクと雪路は同時に家を出た。

「ヒナ、今日の父さんと母さん、おかしかったわね」

「うん、私もそれ思ってたの」

「何なのかしらね…」

「あんなに激しく喧嘩する人じゃなかったのに…」

「まあ、私達が考えても仕方ないことよね。いつか、戻るわよ！」

「そうよね、お姉ちゃん！それじゃ、行って来ます！」

「道草食わないで幼稚園に行くのよ！」

「うん！」

雪路は自転車で、ヒナギクは歩いてそれぞれの目的地に行く。ヒナギクの通う幼稚園は、およそ200メートルしかないから、5分足らずで着くのだ。

「おはようございます！」

いつも通り、幼稚園の先生に元気よく挨拶するヒナギク。

「あら、おはよう！」

幼稚園の先生は、少し驚いていた。実は、すでにヒナギクは幼稚園を移るように、雪路はやめさせられていたのだ。幼稚園を移るといっても、もちろん次などない。一方の雪路は。

「おはようございます！」

「あれ？桂、なんでこの学校来てるんだ？」

「は！？来ちゃいけないの！？なんでよ！」

「いや、お前こそなんで知らないんだ？」

「は？」

「お前の親が、雪路はもう学校をやめると言ったんだ」

「な…なんですって!？」

雪路は急いで家に戻る。そのとき、すでに親の姿はなかった。

「父さん、母さん!…?」

ふとテーブルにあった2枚の紙を見る。

「ん…一枚は、手紙？」

そこには、こう書かれていた。

『ヒナギクと雪路へ』

本当にごめんなさい。私達は、あなたたちを育てられる状況ではなくなってしまう。これからは、この方と住んでください。

父・母』

「ど、どういっ…」

紙がもう一枚あったことに気付く雪路。

「何これ？…！…借用書！？しかも…8000万！？」

雪路は書かれていることの意味をだんだん理解してきた。つまり、借金返済のために売られたのだ。

「…」

しばらく呆然としていた。しかし、そんなことをしている場合ではない。

「ヒナは…」

ヒナギクは幼稚園を出ているのだろうか？いや、それならすぐに帰っているだろう。どっちにしても、ここにいるのはまずい。

「早いとこ、逃げなきゃ…！」

雪路は家から出る。ふと振り返り、家を見る。

「…さようなら、今日までありがとう」

そう言い残して、雪路は走って行った。

「はあ…はあ…」

雪路はなるべく家から離れたところに行った。

「あ!…」

「な、何?…」

することがなく歩いていると、ある女性に会った。

「あなた…学校は?…」

見知らぬ人だった。しかし、雪路は制服姿だったから、そう思われるのは当然だが。

「あ、いや、その…」

「ハア、ハア…探したぞ、桂…」

「先生!…」

「え?じゃあこの子、あなたのクラスの生徒なの?…」

「じゃあこの人は…先生の奥さん!?…」

「ええ。でも、びっくりだわ!…」

「そんなことより、なんでやめたんだよ！」

「知らないわよ！知らない間に学校はやめさせられるわ、借金押しつけられるわで…」

「まあ…」

「ったく、お前、ちょっと俺の家に来い」

「は？」

「住まわしてやるよ。家ないんだろ」

「…じゃあ、お願いするわ」

てなわけで、雪路は夕方まで先生の妻といろいろ話していた。

「あ、そろそろヒナを迎えに行かなきゃ」

「ヒナ？」

「妹なの。幼稚園にいるから」

「分かったわ。じゃあ、行ってらっしゃい」

ところ変わって幼稚園。

「ヒナ！」

「あ、お姉ちゃん！」

何も知らないヒナギクが、明るい表情で雪路の元に来る。

「ヒナ、父さんと母さんね、外国に行っちゃったの。だから、その間、別の人の家に泊めてもらっからね」

残酷すぎて、本当のことなど言えなかった。

「あ、それで喧嘩になったのね。なあんだ。じゃあ、そこに連れてって！」

新しい家。

「ここよ。覚えておいてね。ただいま！」

「おかえり」

この人が、ヒナギクと雪路の義理の母親だった。

「じゃあ私、出かけて来るわ！」

「ちよつと雪ちゃん！行っちゃった…」

「…」

それから、ヒナギクと雪路のクラスの先生の妻は、話していた。

雪路は、借金をなんとかしようと思っていた。

「あ、もしもし？悪いけど、お金用意してくんない？」

雪路は友人に頼み込んだ。しかし、それでもたかが知れている。仕方ないから暴力団に加入したふりをして、頭のキレのよさを使って大金を手に入れた。そして、貸し主に返した。

「なんとかなつたわね…随分減つたわ」

そつ、もう借金は友人から借りた分だけ（約200万）になった。

その分は親戚に出してもらった。その分は、雪路は教師の資格を手に入れて、1年かけて働いて返した。

ある日。

「ねえ、お姉ちゃん」

ヒナギクが雪路を呼んだ。

「何？」

「お父さんとお母さん、いつ帰って来るの？」

「…！ま、まあしばらく無理って言ってたから…」

「お姉ちゃん…なんで本当のことを教えてくれないの？」

「えっ…」

「昨日、私、聞いたのよ。あの二人が話してたの」

「ヒナ…」

「確かに私は何もできないよ。でも、事情くらい説明してよ！お姉ちゃんが辛い思いをしたの、知ってるんだから」

「ヒナ、ごめん。でも、私だってヒナに心配かけたくなかったし、それに、こんな残酷な話、話せないわよ…」

「…でも、嬉しかった」

「え？何が嬉しいのよ！私達は捨てられたのよ！」

「ううん、そっちじゃないの。お姉ちゃんが…私を見捨てなかったことが嬉しいの…」

「…」

こうして、私達は新しい生活になった。でも、まさか私達と似た経験をした人がまだいたなんて…。しかもその人は、ずっと一人だったらしい。だから、誰の助けも借りずに生きていた。本人は慣れていると言っていたが、それほど残酷なことはないと思う。だから、

伝えてあげたい。

『人と協力するということは、とても素晴らしいことなんだよ。あなたにも、それはできるはず。なぜなら、私にそんな思いをさせてくれたのは、あなたなのだから。』

と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4591h/>

ヒナギク・雪路の過去

2010年10月9日15時04分発行